

保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討

矢野 洋子

九州女子短期大学子ども健康学科

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年5月31日受付、2011年7月15日受理)

要 旨

保育士資格は、「児童福祉法」に規定されており保育所で働くだけでなく、児童福祉や福祉の現場で幅広く働くこのできる福祉職である。保育士養成においては、保育士資格の取得のためには、「保育実習Ⅰ」（保育所及び児童福祉施設等での実習）「保育実習Ⅱ」（保育所での実習）または「保育実習Ⅲ」（保育所以外の児童福祉施設等での実習）という3回の実習が必要である。しかし、「施設実習」に関しては養成校や学生の意識も薄くまた実習施設の種類が多いことや現代の保育や施設の現場において求められる専門性の多様化もあり、実習指導の難しさがあるといえよう。そこで本稿では、「施設実習」を終えた学生へのアンケートから施設実習の意義や事前指導の在り方についての検討を行った。その結果、大多数の学生は実習に意義があったと感じているが、障がいやケアの必要な子ども達への支援方法についての事前の学習を必要としていることが分かった。また実習指導の内容の多様化が求められていることから、一定の実習指導の時間だけではなく他の関連する科目においても実習を意識した内容を加味することにより、より実習事前学習としての意義があることを報告した。

キーワード： 保育士養成 施設実習 実習事前指導

1. はじめに

保育士の資格については、「児童福祉法」第18条に次のように規定されている。「～専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」つまり保育士という資格は保育所で働くだけでなく、児童福祉や福祉の現場で幅広く働くこのできる福祉職である。

保育士養成においては、保育士資格の取得のために「保育実習Ⅰ」（保育所及び児童福祉施設等での実習）「保育実習Ⅱ」（保育所での実習）または「保育実習Ⅲ」（保育所以外の児童福祉施設等での実習）の履修において、計3回の実習が必要である。その中で「保育実習Ⅰ」（保育所10日間、施設10日間）の実習は短期大学においては1年次の2～3月に行われることが通常である。

「保育士」という仕事は、人間に直接かかわり生命と人生に関わる仕事である。医療や看護においてもよく言われるように、理論だけではなく実際の人間に触れ臨床経験が重要であるのと同様に、保育士養成における実習もそれまでに講義や演習などを通して学んだ机上の内容や実技を、実際に子どもや利用者とふれあいコミュニケーションをとることから体験しさらに実践の楽しさや難しさを感じ、その反省などを通して振り返り今後の学習の糧としていくために重要な位置づけにあるといえよう。

しかし、保育実習の中でも保育所における実習は各養成校において様々な実習指導の工夫がなされ、より効果的な実習ができるよう取り組まれてきているが施設実習についていくつかの問題点を感じている。以下にその4点についてあげてみる。

1. 保育士養成における養成校と学生の意識

「保育士」という職業は社会福祉職であり保育所だけが将来の職場ではないのにもかかわらず、「保育」ということばからか養成校側が、保育所保育士養成に偏りやすい傾向にあるのではないか。

また学生の一般的な意識としても、入学直後の自己紹介などで入学動機として「子どもが好きなので保育士を目指した」や「保育所で働きたい」などの保育士＝保育所で働く事という意識が非常に強いと感じている。実習についての概論を説明し「施設実習」の説明をすると、概ねの学生はびっくりした表情を浮かべ、さらに不安気である。そのような学生に対して施設実習を含めた保育実習指導を行っていくわけであるが、「資格取得のために必要な実習」だから仕方なく行くという指導を行うことだけは絶対に避けなければならない。なぜ保育士になるために施設での実習が必要であるのかについて様々な方向性から学生に理解してもらうことが重要である。

2. 施設実習の実習施設の種類について

上記と関連すると思われるが、施設実習は児童福祉施設のみではないのにもかかわらず、「子ども」という観点からか施設実習の実習園として「児童養護施設」「乳児院」などに圧倒的な集中があり、その他の施設「知的障がい児・者施設」特に知的障がい者施設での実習を取り入れている養成校は数多くないのが現状である。

3. 現代の保育や施設の現場において求められる専門性の多様化

現在の子どもを取り巻く状況の中で、「虐待」や「障がい」の問題は特に増加傾向にありその対応については現場において困難なケースが発生している。

そのためこれからの保育士養成に関しては、そのような様々なケースに幅広く対応出来る保育士の養成を視野にいれるべきであるのではないだろうか。

4. 実習指導の在り方

様々な種類の施設への実習が同時に行われることから、各施設の特徴や目的に応じたきめ細かい実習指導が必要不可欠なのではないだろうか。つまり「施設実習」に対する指導をもっと専門的にきめ細かく行うことが養成校には求められていると強く感じる。

そこで、本稿ではこれらの問題点から学生へのアンケート調査を行い、施設実習の意義と実習指導の在り方について検討を加えた。

II. 方法

1. 対象と方法

平成23年2月～3月に施設実習を終了した短期大学の学生のうち、「実習事前事後指導」の当日の授業に参加した67名の学生に授業の中で無記名でアンケート調査を行い、当日回収した。

アンケートの内容については資料に示す。

III. 結果

「施設実習」の施設種類の内訳は、児童養護施設35名（以下Aグループ）乳児院7名（以下Bグループ）知的障がい児施設6名（以下Cグループ）知的障がい者施設19名（以下Dグループ）の4種類、計67名である。

1. 実習の意義について

施設実習が意義あるものであったか否かについての返答は表 I に示す。

Bグループ、Cグループ、Dグループともに全員が「意義があった」と回答したのに対し、Aグループは27名（77.1%）、3名（8.6%）は「意義はなかった」5名（14.3%）は「わからない」と答えているが、全体的には59名（88.1%）が「意義があった」と感じている。

表 I

	A	B	C	D	合計
意義があった	27 (77.1%)	7	6	19	59 (88.1%)
意義はなかった	3 (8.6%)	0	0	0	3 (4.5%)
わからない	5 (14.3%)	0	0	0	5 (7.4%)
	35	7	6	19	67

2. 具体的な理由について

1の回答について、自由記述で記入した内容を表IIにまとめている。複数回答ではあるが、1～7までは肯定的な理由で「意義があった」と回答した学生からの内容であり、特に「授

業で学んだことを体験して理解」や「自分自身が成長した」が多く、次いで「利用者とのコミュニケーションなどのかかわりを持てたこと」「施設へのイメージがかわった」「具体的な援助方法が学べた」となっている。講義や教科書などでの机上の学びが施設実習を通じて、実際に体験することでより理解が深まったことがうかがえる。また施設実習により、現在の福祉の現状や支援の在り方について考えさせられたり、自分自身の成長につながったことを実感している学生が多い。

しかしその反面、「その他」の中には「子ども達への対応の仕方に疑問を感じた」「仕事はただの肉体労働にしか感じなかった」など否定的な意見があり、それはすべて施設実習に「意義はなかった」「わからない」と答えたAグループからの回答であった。

表II 問1の理由（複数回答）

1	授業で学んだことを体験して理解できた。	28
2	自分自身が成長できた。考えさせられた。	23
3	自分でコミュニケーションをとったり、個別に対応できたこと。	18
4	施設に対するイメージが変わった。	17
5	利用者への対応の仕方や援助方法が学べた。	15
6	施設の生活の様子が見れた。	10
7	福祉の現状を聞いた（知ることが出来た）。	2
8	その他	4
9	わからない	1
10	無回答	2

表III 学生の実際の回答から抜粋（☆印は回答多数）

<Aグループ>

- ① 授業は15回と本当に回数が少なく、教科書やビデオだけでは見えない部分もある。やはり身を持って体験することで何かを感じ、得るものがあるので絶対に必要だと思う。
- ② 掃除や洗濯が多かったが、掃除や洗濯をする意味や一人一人の子どもの事を考えながら行うことが大切だという事がわかったのでとてもよかった。
- ☆③ 施設のイメージが悪く、怖いと思っていたが子ども達とたくさんふれあって笑顔も見られ、イメージが変わり就職したいと迷うくらいになった。
- ④ 一人一人としっかりかかわることができ、また自分なりに毎日課題を見つけて取り組むことができた。反省点を見直して翌日に活かすことができた。
- ☆⑤ 実習でなければ行くことのない施設であったが、実際に子ども達と生活を共にすることで考えさせられることが多くあった。

<Bグループ>

- ☆① おむつの変え方、ご飯の与え方などを実際に体験することができ、また社会の厳しさについて職員から話していただいたりしてとても勉強になった。
- ☆② 精神的にきつかったが、10日間の実習で精神的に成長して強くなった。子どもたちの成長段階が見ることが出来てよかった。
- ③ 最初は第3希望の施設であったし、養育の施設であり1日中ピリピリした雰囲気の中でやっていけるかという不安はたくさんあったが、保育所では経験できないことを経験できてよかった。

<Cグループ>

- ① 見た目は障がいがあるとわからない子どもからわかる子どもまで、本当にさまざまで最少はとても戸惑った。しかし積極的に声をかけたり、遊びに入ったりして徐々に子ども達と仲良くなれた。障がいがある前に一人の人間として接する大切さを教えてくれた子ども達や先生に感謝している。
- ② 非言語的コミュニケーションの大切さがよくわかった。
- ③ 授業で聞いたことが実際に体験できて、理解することができた。様々な人とコミュニケーションを取ることができたことや、たくさんすることに挑戦できた。
- ④ 障がいをより詳しく理解できた。一人一人全く違う対応をしないといけないことなど、実習だからこそ学べるが多かった。

<Dグループ>

- ☆☆① 最初は接するのがとても怖かったけど、毎日過ごす中で利用者さんたちの特徴やこだわり、好きなものや優しさなど良いところをたくさん見つけることが出来た。また職員からも細かく仕事や対応の仕方などを教えてもらい、食事・排せつ・入浴・歯磨き等の介助をしてとてもやりがいのある仕事だと感じた。最初の怖さも吹っ飛んだ。障がいを持っている方への考えや気持ちが変わり、良い経験になり視野が広がった。
- ☆☆② 子ども達対象ではなく、18歳以上の知的障がい者の方々を対象に実習を行い、普段あまり知的障がい者の方と接する機会がないのでよい経験になった。
- ☆☆③ 知的障がい者施設で就職したいと思うようになった。

3. 実習で役に立った授業について

次に実習指導以外に、施設実習に役に立ったと思う授業とその内容について（複数回答あり）聞いたところ、全体的に表IVのような結果となった。

授業の内容としては、「精神保健」・・・「障がいの種類などについて」、「児童福祉」・・・「障がいについて」「児童福祉の仕組み」、「社会福祉原論」・・・「施設のビデオ」「サービスについて」、「養護原理」・・・「実際の施設について」「児童虐待について」などの内容があ

げられている。それぞれ実習をした施設の種類によって、回答にはばらつきが見られる。

表IV 施設実習に役に立った授業（複数回答）

1. 精神保健、児童福祉	3 1
2. 社会福祉原論	2 2
3. 養護原理・養護内容	2 1
4. 発達心理学・保育内容（言葉）	3
5. 保育内容（表現）・社会福祉援助技術	2
6. その他（乳児保育・算数科教育概論・同和教育・器楽など）	7
7. 無回答	1 1

4. 実習前にどんなことを学んでいたらよかったか

実習した施設によって違いはみられるが、「実際に先輩が施設実習を行った時の話を聞いたかった。」「絵本の読み聞かせや手遊びなどの保育技術」「障がいへの理解」「障がい児・者や虐待を受けた子どもへの関わり方について」「実際にボランティアなどで体験しておくよかった」などが共通してみられる回答であった。Bグループでは特に「おむつ交換など実技」という回答が目立っていた。

V. 考察と今後の課題

(1) 保育士養成における養成校と学生の意識について

前述したように養成校や学生は、保育士の活動範囲が保育所を中心とした「子ども」の限定したものと偏りがちであることを意識して、保育士は保育所や児童福祉施設のみで活動する職業ではないこと、知的障害者施設や子育て支援など幅広く行われることを、実習指導だけではなく、様々な授業の中で学生に伝える必要がある。また、教師自身も施設実習は保育士資格取得のための単なる消化実習ではなく、将来の進路とはなり得なくてもその経験が生かされる可能性のある意義深い実習であることを認識し、指導に当たることが望まれる。

(2) 施設実習の実習施設の種類について

「保育実習Ⅰ」における施設実習は、乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、肢体不自由児療護施設、重症心身障碍児施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、入所型の知的障害者更生施設や知的障害者授産施設、児童相談所の一時保護施設または独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園等の指定された居住型の施設での実習が義務付けられていたが、2010年7月に保育士養成課程の改正が行われ、知的障害児通園施設、自閉症児施設、難聴幼児通園施設、

肢体不自由児通園施設、肢体不自由児療護施設、通所型の知的障害者更生施設や知的障害者授産施設、知的障害者小規模通所授産施設等での実習も可能となった。

この実習施設の一覧でもわかるように、決して子どもに限定された施設ではない。もちろん施設の実数が保育所に比較して圧倒的に少ないが、養成校では児童福祉施設、特に乳児院や児童養護施設に集中する傾向にある。今年度初めて知的障がい者の施設を実習先に追加してみたが、終了後の学生の評価は概して高く「非常に勉強になった」という意見が多くみられた。将来の就職先として考えるという学生もおり、今後も実習施設として大いに取り入れるべきであろう。現実に保育所でも障がいを持つ子どもの受け入れは増加しており、障がいに対する知識などももちろん必要ではあるが、成人した障がいを持つ方と触れ合うことは、幼児期の教育の在り方について考えさせられる良い機会となる。幼児期から成人期まで長いスパンで障がいを持つ子どもを見るという事が今後の幼児教育者や保育者に求められる視点であり、そのための一助となるのではないだろうか。

2. 現代の保育や施設の現場において求められる専門性の多様化

特に児童養護施設においては、虐待を受けた子どもたちの入所が激増しており施設における支援の難しさが増している。特に児童養護施設では10日間宿泊の実習がほとんどであり、通常の生活とかけ離れた生活を余儀なくされる学生のストレスと、心に様々な傷を抱えた子ども達とのかかわり方の難しさから予想以上に一番大変だと感じる学生が多い。しかし現実には、保育所などでは虐待の早期発見や通告が義務つけられておりまた家族への支援が求められている。前述した障がいを持つ子ども達への支援と同様に今後深く広い専門性が求められる分野である。

3. 実習指導の在り方

実習前には、施設実習に限らず様々な不安を感じるものである、特に施設実習は施設は利用児・者にとっては生活の場（家庭に代わる場所）であることから、宿泊の実習がほとんどである。利用している方々と同じ生活環境を体験することから、理解を深めるためには必要不可欠であるが、なかなかすんなりとは受け入れがたい緊張があるようである。

そのような緊張や不安を軽減して、実習への目的意識を高めていくことが事前の実習指導には求められる。しかし実際には、実習へ向かうための様々な準備（表Vに示す）は「実習生調査票」「健康調査票」「腸内細菌検査」などの様々な必要書類の記入などの準備、施設への事前訪問、日誌の記入練習、指導案作成などの物品の準備などに時間を割かれることが多い。実際に実習施設に提出する書類に不備がないようにしなければならないし、記入の仕方にも詳細な指導が必要であり時間が割かれてしまうことが現実である。また提出期限を守らない学生もあり、実習における基本的なルールを理解してもらうことから必要な学生も年々

増加している。

さらに、毎日の記入が必要な実習日誌の書き方や指導案作成についても誤字脱字や文章の書き方に注意を受けることが多く、学生一人一人へ個別指導が必要であり、多くの時間を費やすこととなる。また昨今の学生には、実習にあたっての諸注意についてもかなり細かい内容（例：掃除の方法・挨拶の方法・欠席などの病気の連絡など）を指導しなければ以前には見られなかったような「非常識」な出来事が起こることもある。実習は社会人としてのマナーを学ぶ場でもあり、上述したような事前の指導は不可欠である。

表V 事前指導の一般的な内容（実習施設決定後）

① 提出書類の作成
・実習生調書（写真つき）
② 提出書類の準備
・腸内細菌検査
・健康診断書
③ 実習施設への事前訪問の確認電話
④ 事前訪問
⑤ 事前訪問の報告と課題の準備等
⑥ 実習日誌記入方法の指導
⑦ 指導案作成方法と作成
⑧ 実習に関する諸注意事項の確認
⑨ 巡回教員への挨拶と打ち合わせ

つまり限られた「実習指導」の時間の中では、事前の準備にほとんどの時間を費やす必要性は否めない。いや、むしろ費やすべきである。

そこで、「実習指導」以外の他の教科において学んだ内容を、うまく実習につなげていくようなヒントをそれぞれの授業の中で常に行っていく必要がある。アンケート結果においても、施設の種類によって多少の違いはあるが、特に施設実習においては福祉系の科目などの内容が直接実習に役立ったと感じている学生が多くみられる。

実習の意義については、59名（88.1%）という高い割合で意義はあったと学生は感じている。その理由についても実習前にそれぞれが抱いていた「施設」へのイメージが大きく変わったと感じているようであったが、なによりも「現場にいて」「実際に利用児・者と関わり（コミュニケーションをとり）」「職員の対応から支援方法を学ぶ」ことから授業で学んだ福祉や利用児・者への知識を具体的に体験し、いろいろと考えさせられることによりより深い洞察が出来たことが大きいように思われる。

結論として、今後の施設実習の在り方のポイントについてまとめると、

1. 子どもを対象とした施設のみではなく、障がい者も含め幅広い実習施設選択を行う。
 2. 実習指導の時間では不足しがちな、各施設の概要・特徴・利用児・者とのかかわり方など専門的な詳細は関連した科目の中で、施設実習を意識した内容を盛り込んで行うことによって不足分を補う。
 3. 「保育士」資格を保育所に限定して考えがちであることを踏まえて、入学後から保育士がさまざまな分野で活躍できる仕事であることを伝えていく。
 4. ボランティアなどを取り入れ、実習前に様々な施設での体験を取り入れる。
- このように「施設実習」を意識した取り組みを行うことによってさらに実習が充実したものとなり、幅広い知識と意識を持った保育士養成が期待されると考えられる。

参考文献

- 1) 石山貴章、安部孝（2008）保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅰ）－短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して－。
- 2) 石山貴章、安部孝、田中誠（2010）保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅱ）－実習事後指導を通下「自己評価」と「気づき」に関する分析から－
- 3) 小野澤昇、田中利則編著（2011）保育士のための福祉施設実習ハンドブック

The meaning of the facility practice in case of child care man training-up and the reviewing about the preliminary guide

Yoko YANO

Department of Child hood care and Education, Kyushu women's junior college
1-1Jiyugaoka-Yahatanisi-Ku,Kitakyushu-Shi,Fukuoka,,807-8586,Japan

Abstract

The child care man qualification is this made welfare job which works widely on the scene of the children's welfare and the welfare in addition to being provided by " the Child Welfare Law " and working at the child care center.

In case of child care man training-up, the practice with three times, " I " (the practice in the child welfare facility except the child care center and so on) (the practice in the child care center) (the practice inside the child care center and in the child welfare facility and so on) " of the child care practice " " II of the child care practice " or " III of the child care practice ", is necessary to the merit of the child care man qualification.

However, as for " the facility practice ", it is thin and also there is diversification of the child care in thing today with many kinds of the practice facilities and the specialty which is sought in the scene at the facilities, too, in the consciousness of the training-up school and the student, too, and there is difficulty of the practice guide. Therefore, at this article, it reviewed about the meaning of the facility practice and the state of the preliminary guide from the questionnaire to the student who ended " the facility practice ".

As a result, the large majority student felt that the practice had meaning but it found that it needed preliminary learning about the way of supporting to the children who need an obstacle and care.

Because also, the diversification of the contents of the practice guide is demanded

It reported that there was meaning as the preliminary practice learning more by taking account of the contents which were conscious of the practice about the other related subject in addition to the time of the constant practice guide, too.

key words : Child care man training-up/Facility practice/Preliminary practice guide